読売新聞
（第3種郵便物認可）

子宮移植 実施へ課題

技術「未完成」・費用やケア

スキャナー SCANNER

日本医学会の検討委員会が、妊娠、出産を希望する子宮がない女性に対する子宮移植の臨床研究を容認する報告書をまとめた。国内初の実施を目指す慶応大のチームは、学内の倫理委員会に研究計画書を提出する準備を進めるが、医学的な技術や知見は十分に蓄積されておらず、倫理的な課題も残されている。（医療部　野村昌玄、米山粛彦）

■「複雑」

「問題そのものが複雑で、何が正解なのか分からなかった。最終的には多数意見をもとに方向性を決めた」

検討委の飯野正光委員長（東京大特命教授）は14日の記者会見で、「容認」の結論まで2019年4月から2年余りを要した理由を語った。生体移植に大きなリスクが指摘される一方、委員長を除く委員13人中、11人が「当事者がリスクを十分に理解し、実施したい意思がある場合、あえて排除することまではできない」との意見だった。

16年から生まれつき子宮のない「ロキタンスキー症候群」の患者への実施を計画してきた慶応大産婦人科の木須伊織・特任助教は「ずっと移植を待ち望んできた患者がいる。速やかに準備を進めたい」と語る。提供者（ドナー）は60歳未満、移植を受ける患者は40歳程度までを想定している。今後、子宮筋腫などの病気で子宮を失った人も対象に加える考えだ。

■法令改正に時間

検討委の容認には、子宮を持たない女性が出産を望む場合の選択肢が限られていることが背景にある。

臓器移植は、脳死移植が基本で、健康なドナーの負担が大きい生体移植は最後の手段といえる。だが、臓器移植法で定められた脳死ドナーからの移植は、生命維持にかかわる心臓や肺、肝臓などに限られ、子宮は対象外だ。検討委は、臓器移植法などの法令改正を提言したが、厚生労働省は「実現性や安全性のデータがそろってから議論する」（担当者）としており、実現には時間がかかる。

子宮のない女性に代わり、夫婦の受精卵を使って第三者に産んでもらう「代理出産」という手段もあるが、日本産科婦人科学会は実施を認めていない。代理母が出産のリスクを負うことに加え、民法上は「出産した女性」が母親となり、親子関係も複雑になる。

このため、報告書は、子宮移植について「子宮のない女性が法律上の実子をもうけることのできる唯一の方法」と位置付けた。委員の一人は「臨床研究を容認しなければ、水面下の実施によるトラブルや、渡航移植の増加を招く恐れもある」と懸念を示した。

■胎児に影響懸念

だが、報告書が「未完成の医療技術」とした子宮移植には、様々なリスクが想定される。

子宮摘出手術は、子宮を傷つけないよう慎重に行うため、平均8時間半もの時間がかかる。移植を受けた人は、拒絶反応を防ぐため免疫抑制剤を使い続ける必要がある。強い薬を使った場合は生まれてくる胎児への影響も懸念される。

世界的にも症例数は少ない。子宮移植は、00年にサウジアラビアで試みられて以来、21年3月時点でスウェーデンや米国などで85件実施された。生まれた子どもは40人にすぎず、将来の影響は分かっていない。

慶大チームの臨床研究では、移植から出産まで1件あたり2000万円以上かかる見込みで、経済的な負担も大きい。

患者などへのサポートも欠かせない。

提供者は母や姉妹ら親族が想定されるが、本人が自発的に無償提供に同意していることが必須条件だ。

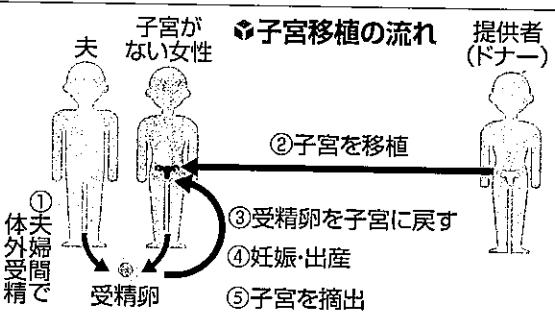
検討委は、子宮移植に至る以前に、ロキタンスキー症候群の患者や家族を精神的に支えるカウンセリング体制の確立も求めた。診断時に、医師が本人に知らせず母親任せにしたり、専門医が紹介されなかったりするケースがあるためだ。

玉井真理子・信州大准教授（生命倫理学）は「当事者に一人ひとり思いを聞き、家族の形には様々なものがあることを丁寧に伝えていくことが大切だ」と話している。

臨床研究の条件

- ▽患者は移植により妊娠・出産できる可能性が高い人とする（おおむね40歳以下）
- ▽夫婦やドナーが、移植や無償提供に自発的に同意していることを確認する
- ▽当事者の長期的なカウンセリング体制を整備
- ▽日本移植学会と日本産科婦人科学会が合同で実施体制をチェックする

子宮移植の流れ



子宮移植の臨床研究について記者会見する日本医学会の門田守人会長（手前）ら（14日、東京都文京区で）＝高橋美帆撮影

初の臨床研究

患者「待望の選択肢」

子宮移植の臨床研究が容認され、患者からは期待の声が上がっている。

「移植しても簡単に望みはかなわないかもしれないが、まずは挑戦したい」

18歳の時にロキタンスキー症候群と診断された愛媛県内の女性会社員(27)は、今回の判断を喜ぶ。子どもが好きで「高校を卒業したら、すぐにでも子どもを産みたい」と思い描いていた。その夢が絶たれ、介護職やウェブデザイナーなど、あえて子どもと関わらない仕事を選んできた。だが、自分の気持ちを見つめ直し、昨年7月に学童保育の仕事に就職。今は、ドナーや医療費など条件がそろえば、移植を受けたいという。

「子どもを産めない自分は、好きな人に捨てられるのではないか」「病気について人に言えない人がたくさんいる。もっと世間に知ってほしい」――。

患者団体「ロキタンスキーの会」が昨年2月に検討委に提出した要望書には、病気への理解と移植の実現を求める声が多く記された。

生まれてくる女児の4500人に1人は、ロキタンスキー症候群とされる。会は2014年6月に発足。SNSを通じて患者同士が健康上の悩みや恋愛、結婚などについて相談に応じたり情報交換をしたりする活動を続けており、現在は10～50歳代の会員90人以上が参加している。

子宮移植については、患者の中にも様々な意見がある。そのうえで、会を運営する40歳代の女性は「待ち望んでいた選択肢を得られた意義は大きい」と話す。

子宮移植　第三者から提供を受けた子宮を女性に移植する技術。定着した子宮に、体外受精したカップルの受精卵を戻し、妊娠、出産を目指す。移植後は、拒絶反応を防ぐため免疫抑制剤を使う必要があり、子宮の定着の確認に1年ほどかかる。出産は帝王切開となり、子どもを産み終えたら子宮を摘出する。